

## 初代教会における「福音の理解」の再考

### ベレーシート

【新改訳 2017】Ⅱテモテへの手紙 4 章 2～4 節

2 **みことば**を宣べ伝えなさい。時が良くても悪くてもしっかりやりなさい。

忍耐の限りを尽くし、絶えず教えながら、責め、戒め、また勧めなさい。

3 というのは、人々が**健全な教え**に耐えられなくなり、耳に心地よい話を聞こうと、

自分の好みにしたがって自分たちのために教師を寄せ集め、

4 **真理**から耳を背け、作り話にそれて行くような時代になるからです。

●各節にある「みことば」「健全な教え」「真理」は同義です。パウロはヘブル特有の修辞法によって、「福音」を言い換えているのです。パウロは愛弟子であるテモテに対して、「あなたは務めにふさわしいと認められる人として、すなわち、真理のみことばをまっすぐに説き明かす、恥じることのない働き人として、自分を神に献げるように最善を尽くしなさい。」(Ⅱテモテ 2:15)と言っています。パウロ自身にとって「みことば」は「福音」そのものであり、彼を通してそれが余すところなく宣べ伝えられたのです。

●ところで、新約聖書で語られている初代教会の「福音」とは何だったのでしょうか。今回の「靈性の回復セミナー」ではそのことを原点に帰って再考するようにと導かれています。

【新改訳 2017】ヨハネの福音書 5 章 39～40 節

39 あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思って、聖書を調べています。

その聖書は、わたしについて証しているものです。

40 それなのに、あなたがたは、いのちを得るためにわたしのもとに来ようとはしません。

●これは驚くべきイエシュアのことばです。「あなたがた」とはユダヤ人のことです。彼らには聖書が与えられていました。ここでの「聖書」とは、私たちがいうところの旧約聖書のことです(ユダヤ人にとっては「タナフ」)。彼らは聖書を自分たちの土台として、それを読み、かついのちを得ようとしていました。ところが、その聖書は「わたしについて証しているもの」だとイエシュアは言われたのです。つまり聖書とはイエシュアご自身について書かれているものだということです。これはとても重要なことです。しかし、「あなたがたはわたしのもとに来ようとはしない」と言われたのです。ユダヤ人は今日でもそうです。クリスチャンであったとしても、ユダヤ人と同様に的はずれな読み方をしているならば、みことば(福音)を正しく悟ることはできないのです。イエシュアはさらに、こうも言われました。

【新改訳 2017】ヨハネの福音書 5 章 46～47 節

46 もしも、あなたがたがモーセを信じているのなら、わたしを信じたはずです。

モーセが書いたのはわたしのことなのですから。

47 しかし、モーセが書いたものをあなたがたが信じていないのなら、  
どうしてわたしのことばを信じるのでしょうか。

●これはどういう意味でしょうか。「聖書」が「モーセ」に換わっただけです。ユダヤ人にとってモーセは偉大な人物です。モーセ五書(創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記)は、旧約聖書の中で最も中核的な部分です。それを書き記したのがモーセです。ところが、イエシュアは「モーセが書いたのはわたしのことであり、あなたがたがモーセを信じているのなら、わたしを信じたはずです」と言われました。つまり、このことばは「モーセは、わたしを啓示する型となる存在である」という意味です。このことを踏まえた上で、今回、ある一つの話をしたと思います。それは「**百二十歳の奥義**」です。

## 1. 百二十歳の奥義

●創世記 6 章には、地上に人の悪が増大し、その心に凶ることがみな、いつも悪に傾くのをご覧になったので、神は心を痛められて、洪水によってリセットしようとされたということが記されています。このリセットが「ノアの洪水」と言われるものです。しかし神はその前に不思議なことばを語ります。それは、「わたしの霊は、人のうちに永久にとどまることはない。人は肉にすぎないからだ。だから、**人の齢は百二十年にしよう。**」ということばです。なぜ神は唐突にこのようなことばを語られたのでしょうか。

●「**人の齢は百二十年にしよう**」というのは、単なる「百二十歳」という意味ではなく、実は奥義なのです。つまり、隠された神のご計画を示すことばなのです。これを肉で(人間の常識で)理解しようとすると、何の意味もありません。ノア以前の人々の齢は九百年代でした。ノア自身は九百五十年でした。それから次第に人の年齢は少なくなり、ユダヤ人の父祖であるアブラハムの父テラは二百五年で死んでいます。アブラハムは百七十五歳、その息子イサクは百八十歳で長寿を全うしています。さらにヤコブは百四十七歳、ヨセフは百十歳で死んでいます。神が言われた百二十歳で死んだのは、モーセただ一人だけなのです。

●「百二十歳」という奥義を理解するために、先ほどのイエシュアが言われたことば、つまり「もしも、あなたがたがモーセを信じているのなら、わたしを信じたはずです。モーセが書いたのはわたしのことなのですから。」を思い出してください。

① 【新改訳 2017】申命記 31 章 2 節

・・・「**私(=モーセ)は今日、百二十歳だ。もう出入りすることができない。**【主】は私に『あなたはこのヨルダン川を渡ることはできない』と言われた。

※「もう出入りすることができない」とは「もはや自分の務めを果たすことはできない」という意味です。

② 【新改訳 2017】申命記 34 章 5~7 節

5 こうしてその場所で、【主】のしもべモーセは【主】の命によりモアブの地で**死んだ**。

6 **主は彼を、ベテ・ペオルの向かいにあるモアブの地の谷に葬られたが、今日に至るまで、その墓を知る者はいない。**

7 モーセが死んだときは百二十歳であったが、彼の目はかすまず、気力も衰えていなかった。

●モーセの死に際しては、主が自ら彼を葬っており、彼の墓を知る者はだれもないのです。そして、死んだにもかかわらず、「彼の目はかすまず、気力も衰えていなかった」と記しているのです。これは普通あり得ないことです。ここに奥義が隠されているのです。つまり、モーセの百二十歳の死において、**イエシュアの死と復活が預言されている**ということなのです。

●「人の齢は百二十年にしよう」という神のことばには、**御子イエシュアの死と復活によって、人を新しく造り変えようという神のご計画が啓示されていた**のです。その型がノアの洪水と箱舟の話です。その箱舟に入った八人が水を通して救われました。これはバプテスマの型です。「この水はまた、今あなたがたをイエス・キリストの復活を通して救うバプテスマの型なのです」とペテロは語っています(1ペテロ3:21)。

●ノアはイエシュアを表しています。なぜなら、ノアの名は「慰め」を意味する「ノーアッハ」(נֹחַ)です。その語源は「ナーハム」(נָחַם)で「慰める」(強意形)という意味だけでなく、「神が悲しむ、あわれむ、思い直す」という意味を持っています。それはいわば「神の救い」を意味しています。そして彼だけが、「**主の心にかなっていた**」(創6:8)のであり、「彼の世代の中にあって**全き人**」であり、「**神とともに歩んだ人**」であったのです。これはまさにイエシュアの型です。さらに、ノアとともに箱舟に入ったのは、ノアの妻と三人の息子たちのその妻たちからなる総勢八人です。その三人の息子とその妻からもろもろの国民が地上に分かれ出ますが、そのもろもろの国民はノアにあって包括的に救われたと言えるのです。人だけではなく、すべての生き物たち(被造物)もそうです。**ノアの箱舟は、イエシュアによって人と被造物が包括的に救われるという型を示す出来事**だったので

●神のご計画とみこころは「イエシュアの贖いの事実」を通して、人をイエシュアのうちに取り込んで(包括して)、人を新しく造り変えることです。「死と復活」によって人を新しく造り変えるという神のご計画を知るためには、キリストの贖いの事実を正しく理解する必要があるのです。つまり、初代教会の福音の理解に戻らなければなりません。

●初代教会の「贖いの理解」は「死と復活」にとどまってはいませんでした。「最後のアダム」であるイエシュアの死は、「最初のアダム」にあったすべてのものをご自身のうちに包括的に集めて死へと渡され、取り除かれました。そしてさらに「最後のアダム」であるイエシュアは「第二の人」として復活され、すべてを包括的に永遠に回復されました。この一連の事実を、私たちが信仰によって個別に受け入れることで、贖いのわざは究極的に完成するのです。このような視点と理解を明確に持つことは、神のご計画の全貌を知って今を生きることを意味することにつながるのです。

## 2. イエシュアの贖いの出来事

## (1) キリストの贖いの内容

●神の「人の齢は百二十年にしよう」という不思議なことばは、「地上に人の悪が増大し、その心に凶ることがみな、いつも悪に傾くのをご覧になった」神が、「死と復活」という出来事によって人を救い、神が人のうちに住まわれるというご計画を啓示することば(奥義)であることを述べました。神はそのご計画をイスラエルの民の歴史を通して、繰り返し語って来られたのです。そして、その神の計画は「イエシュア」と「インマヌエル」という二つの名前に集約されています。一つは「救う」という意味の「ヤーシャ」(יָשַׁע)に由来する「イエシュア」(יֵשׁוּעַ)の名の中に、もう一つは「神が救った者たちとともに住む」ことを意味する「インマヌエル」(אֱמָנָה)の名の中に啓示されています。以下は、出エジプト記それ自体が啓示していることです。**救いの目的は神が民の中に住まわれることです。**

25～40章      1～24章

内住

救い

●この救いを、イエシュアによる贖いの一連の出来事(以下の 1～11)として見て行きたいと思います。その一連の出来事こそ**キリストの贖いの出来事(=福音)**なのです。この出来事を知ること、キリストの贖いの偉大さを知ることができ、生ける希望をもってこの世を生きることができるのです。

- |   |              |   |                |
|---|--------------|---|----------------|
| 〔 | (1) イエシュアの受肉 | 〕 | (7) 復活(        |
|   | (2) 罪なき全き生涯  |   | (8) 顕現         |
|   | (3) 受難       |   | (9) 昇天         |
|   | (4) 死        |   | (10) 着座        |
|   | (5) 埋葬       |   | (11) いのちを与える御霊 |
|   | (6) 陰府にくだる   |   |                |

●私たちの贖い(救い)のために、イエシュアはこれら一連の出来事を通してくださったのです。この中でたった一つ欠けても、贖いは成立しません。すべてが必要なのです。そしてこのキリストによる贖いこそ、教会が語り伝え、宣べ伝えるべき「福音」なのです。そして、これらの一連の出来事が「健全な教え」として、「真理」として語られているなら、福音の理解は健全と言えます。しかし、キリスト教会がこの贖い(福音)をそのままに語ることなく、省略して「死と復活」として括ってしまうとすれば、それは危うい、不十分な理解となるのです。キリストの贖いのこれら一連の出来事を省略することなく、いつでも、どこでも、誰に対してでも語り続け、教え続けなくてはなりません。初代教会が伝えた福音を正しく理解することで、教会はいのちを回復し、宣教の働きはかづけられると信じます。

●受肉からはじまって受難と死、さらに復活・昇天・着座によってイエシュアに栄光が与えられました。そして「最後のアダム」であるイエシュアは「いのちを与える御霊となった」(Iコリント 15:45)と使徒パウロは記しています。イエシュア自身も「いのちを与えるのは御霊です」(ヨハネ 6:63)と言われており、パウロはイエシュ

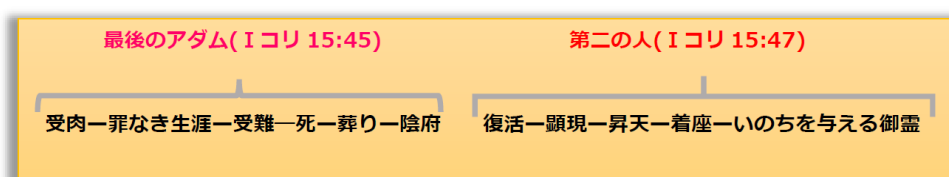
アの贖いの完成としてこのことばを用いているのです。これが福音においてとても重要な部分なのですが、そのことを正しく語っている教会は少ないように思います。奥義派と言われるアンドリュー・マーレー(1828～1917年)の数多くの霊想書の中で、白眉と称される「キリストの御霊」があります。その中でわずかに触れています。その後、20世紀になってから、ウオッチマン・ニーやウイットネス・リーがそれを継承して分かりやすく伝えることで、キリストの贖いの完成を理解しやすくしました。これは新しい教えではなく、新約聖書にある本来の福音を回復させたものです。

## (2) 信条の弊害

●伝統的なキリスト教会では、異端の教えから教会を守るため、また教育目的で作られた数々の信条があります。なかでも、「使徒信条」はキリスト教会の基本的な信仰告白とされています。この信条は二世紀後半に作られ、教会の基本的な信仰告白をまとめたものとして、今日においても、カトリック教会やプロテスタント教会では毎週の礼拝の中で唱和しているようです。私が育った教会では、使徒信条が礼拝ごとに繰り返されていました。ところが、日本の神の教会連盟ではこれを毎週の礼拝ごとに唱える教会と、唱えていない教会があることを、私は神学校時代に知りました。宣教師が開拓した教会ではこれを用いることはなかったようです。なぜなら、神の教会改革運動では、人間が作った信条を一切否定したからです。私自身は使徒信条を告白することになんら問題を感じたことがありませんでした。ところが、今年になって、神の教会改革運動の霊的な力をひしひしと感じるようになったのです。そのきっかけは、キリストの贖いの最後である「最後のアダムのいのちを与える御霊となった」ということに目が開かれたからです。私たちはいつも習慣的に行っていることによって、知らず知らずのうちに「理解の型紙」が造られ、それによって何ら疑問を感じなくなるものです。私自身がそうでした。もし福音の重要な部分が欠落したままの状態であるとすれば、初代教会のように福音が人を動かすことにはならないと考えるようになりました。

●使徒信条の終末の教えは「かしこより来たりて生ける者と死にたる者とを審(さば)きたまわん」の一言だけです。聖書によれば、「生ける者をさばかれる」のは「メシア王国」(千年王国)の直前であり、キリストの再臨の時です。「死にたる者をさばかれる」のはメシア王国(千年王国)の後です(黙示録 20:11～15)。使徒信条は教会の希望である携挙も、メシア王国も何ら教えてはいません。ですから、もう一度聖書に戻って、初代教会が理解した福音を再確認することは、私たちの信仰をメンテナンスすることになります。確かに、使徒信条にあるキリストの贖いの内容には、受肉があり、受難があり、死があり、陰府にくだりの部分があります。そして、さらに復活があり、昇天と着座があります。それ自体決して間違いではありませんが、不十分なのです。不十分というのは、「最後のアダムのいのちを与える御霊となられた」ことで、初めてキリストの贖いの全貌が見えてくるからです。その贖いの全貌をこれから見てみたいと思います。

### キリストの贖いの一連の出来事



●神は「最後のアダム」の死によって旧創造を終わらせ、「第二の人」の復活によって「いのちを与える御霊」という新創造をなされました。パウロはなぜ「第二の人」という表現を使ったのでしょうか。答えは、第二のものが、第一のものよりも優れているという理由からです(I コリント 15:42~49、ヘブル 8:7、9:3, 7, 28、10:9を参照)。したがって、第三、第四というのはありません。

### (3) イエシュアの受肉

【新改訳 2017】ヨハネの福音書 1 章 14 節

**ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。** 私たちはこの方の栄光を見た。

父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。

※①「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。」という部分を、回復訳は「言(ことば)は肉体と成って、わたしたちの間に幕屋を張られた。わたしたちは彼の栄光を見た。」と訳しています。「住まわれた」という部分を「幕屋を張られた」と訳しています。

※②「私たちはこの方の栄光を見た」とあります。それは、イエシュアが復活・昇天・着座されたことで栄光を受けたことを意味します。しかし、それは受肉から始まっているのです。

※③「この方は恵みとまことに満ちておられた」とあります。新改訳では名詞の「ヘセド」(חֶסֶד)を「恵み」と訳しています(新共同訳は「いつくしみ」)。「ヘセド」とは「契約における確固とした愛」を意味します。一方、「まこと」を意味する「エメット」(אֱמֻנָה)は「それを実現する神の力」です。「ヘセド」と「エメット」、つまり「恵み」と「まこと」は二つで一つなのです。どんなにすばらしい愛が語られても、それを実現する力がなければ無意味であるのと同じです。イエシュアによってなされた贖いは「恵み」そのものですが、それだけでは絵に書いた餅同然です。その贖いを私たちのうちに実現させる力こそ「まこと」であり、アーメンなる方なのです。その「まこと」はイエシュアが「いのちを与える御霊となられた」ことによって現わされたのです。その意味でイエシュアは「恵みとまことに満ちておられる方」と言えるのです。

●イエシュアは百パーセント「神」であり、百パーセント「人」です。このような存在は他にいません。そのため多くの者がつまづきます。神は私たちを贖うために、御子イエシュアを「最後のアダム」としてこの世に遣わされました。当時、イエシュアが神であることを知っていた人はどれほどいたのでしょうか。バプテスマのヨハネ、それと悪霊たちとサタンくらいなものです。イエシュアの両親ヨセフとマリアですら、イエシュアのうちに神性を見たときに、理解できませんでした。

### (4) 罪なき、全き生涯

●イエシュアの神性が現された出来事とは、イエシュアが 12 歳の時です。過越の祭りのエレサレムでイエシュアが迷子になったと思われた事件です。ヨセフとマリアが彼を見つけたときにイエシュアが両親に語ったことばは何だったのでしょうか。



【新改訳 2017】ルカの福音書 2 章 49～50 節

49 すると、イエスは両親に言われた。「どうしてわたしを捜されたのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当然であることを、ご存じなかったのですか。」

50 しかし両親には、イエスの語られたことばが理解できなかった。

●イエシュアの神性が現れるとき、両親でさえもイエシュアの言っていることが分からなかったように、多くの者がつまずきました。「五千人の給食」の奇蹟の後に語ったイエシュアのことばに、弟子たちの多くの者が「これはひどい話だ。だれが聞いていられるだろうか」(ヨハネ 6:60)と言っています。「これはひどい話だ」という意味は、イエシュアがご自分の血を飲み、肉を食べる者は永遠のいのちを得ると言ったからです。「ひどい」と訳された「スクレーロス」(σκληρός)とは「気持ちが悪い」という意味です。それはイエシュアの以下のことばに対する反応でした。

【新改訳 2017】ヨハネの福音書 6 章 53～57 節

53 イエスは彼らに言われた。「まことに、まことに、あなたがたに言います。人の子の肉を食べ、

その血を飲まなければ、あなたがたのうちに、いのちはありません。

54 わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠のいのちを持っています。

わたしは終わりの日にその人をよみがえらせます。

55 わたしの肉はまことの食べ物、わたしの血はまことの飲み物なのです。

56 わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、わたしのうちにとどまり、

わたしもその人のうちにとどまります。

57 生ける父がわたしを遣わし、わたしが父によって生きているように、

わたしを食べる者も、わたしによって生きるのです。

●このイエシュアの話をも弟子たちの多くが霊で聞くことなく、肉で聞いているからです。宗教指導者たちも同様です。聖書は食べることについての書です。しかもイエシュアのことばをいのちの木として食べる、このことは聖書が最初から語っていることです(創世記 2～3 章)。食べるということは、その食べるものと一つになることを意味しています。「最初のアダム」はいのちの木からではなく、善悪の知識の木から食べたことでそれとひとつになってしまったのです。神のご計画はもう一度人にいのちの木を食べさせることにあります。しかしそのことを霊ではなく、肉によって理解したために、「ひどい話」となってしまうのです。

●また、イエシュアはご自分が神であり王であるという理由で、神を冒瀆している罪で殺されたのです。それもこれも、すべては肉によるものです。イエシュアはこう言われます。「いのちを与えるのは御霊です。肉は何の益ももたらしません。わたしがあなたがたに話してきたことばは、霊であり、またいのちです。」(同 6:63)。イエシュアの語ることばは、「いのちを与える御霊」によらなければ決して正しく理解されることがないということです。私たちも聖書を読む時に、肉で理解してしまうという危険が絶えずあるのです。

## (5) 受難・死・埋葬・陰府

●イエシュアは苦しみを受けられ、十字架にかけられ、死なれ、埋葬され、陰府にくだられました。しかしこれらのことは、私たちを贖うためです。

●ここで、一つ質問です。

【新改訳 2017】ヨハネの福音書 19 章 30 節

イエスは酸いぶどう酒を受けると、「完了した」と言われた。そして、頭を垂れて霊をお渡しになった。

●ここにある「完了した」(τελέω の現在完了形受動態の「テテレストαι」Τετέλεσται)ということばは、何を意味しているのでしょうか。何が完了したのでしょうか。「完了した」(「テテレストαι」)その内容は、「最初のアダム」によって引き起こされたすべてのことが「終結した」ことを意味します。正確には以下の三つです。

- ① 神に対するすべての負債が血の代価によって免除された(帳消しにされた)こと。
- ② すべての罪が赦されたこと。
- ③ 「最初のアダム」から引き継いでいるものが完全に終結されたこと。

●このために、イエシュアは死の苦しみを味わったのです。ここでいう「死の苦しみ(=陣痛「オーディン」ὠδίν)」とは、「復活によって新しいいのちを生み出す前の産みの苦しみ」のたとえです。「受肉」から「陰府にくだる」までがキリストの贖いの消極面です。しかし、その苦しみにも主の「満足」があります。イザヤ書 53 章には次のように預言されています。

【新改訳 2017】イザヤ書 53 章 10~12 節

10 しかし、彼を砕いて病を負わせることは【主】のみこころであった。

彼が自分のいのちを代償のささげ物とするなら、未長く子孫を見ることができ、

【主】のみこころは彼によって成し遂げられる。

11 「彼は自分のたましいの激しい苦しみのおとを見て、満足する。

わたしの正しいしもべは、その知識によって多くの人を義とし、彼らの咎を負う。

12 それゆえ、わたしは多くの人を彼に分け与え、彼は強者たちを戦勝品として分かち取る。

彼が自分のいのちを死に明け渡し、背いた者たちとともに数えられたからである。

彼は多くの人の罪を負い、背いた者たちのために、とりなしをする。」

●「完了した」というイエシュアのことばには、十字架による「苦しみ」にもかかわらず、「満足する」というニュアンスが含まれています。なぜなら、「最初のアダム」が完全に終結されただけでなく、「わたしは多くの人を彼に分け与え、彼は強者たちを戦勝品として分かち取る」にもあるように、やがて教会を建て上げるための戦利品(御霊の賜物)を得るべく陰府にもくだられることが預言されています。つまりイエシュアが陰府にくだることがなければ、教会を建て上げることはできないことを意味しています(エペソ 4:7~13)。

**(6) 復活・顕現・昇天・着座・いのちを与える御霊となられた**



●キリストの贖いの消極面の後に、積極面が来ます。すなわち、イエシュアが「復活」から「いのちを与える御霊となられた」までの事実です。これは出エジプト記の構造が示しているように、イスラエルの民の救いの目的が幕屋を通して神がイスラエルの中に住まわれることであるのと同様です。**キリストの贖いの一連の出来事(消極面と積極面)こそ、初代教会が伝えた「福音」なのです。**それを簡潔に表した預言こそが「百二十歳の奥義」である「死と復活」と言えます。しかし、その内実を私たちは時が良くても悪くても、常に宣べ伝え、教え続ける必要があるのではないのでしょうか。

●イエシュアの十字架の死は私たちのすべての負債を帳消しにして、罪を赦すためです。そしてより大切なことは、「最後のアダム」が人となって「最初のアダム」を完全に終結させることでした。しかしそれは贖いの消極的な面です。贖いの積極面はイエシュアが「第二の人」として復活し、昇天し、御座に着座されたことで栄光を受けられ、「いのちを与える御霊」となられたことです。そのことによって、私たち(被造物全体も含めて)が新しく造られる道が開かれたのです。このことが**贖いの究極的目的**です。そのために神であるイエシュアが必然的に人間とならなければならなかった(=からだを持たなければならなかった)理由です。聖霊が存在するだけでは、それは絵に書いた餅のようで、新しい創造は決して成し得ることができません。ここに、**御子による贖いの偉大さ**があります。

●イエシュアは「わたしと父とは一つです」(ヨハネ 10:30)とされました。それならば、「わたしと御霊とは一つです」とあってもおかしくありません。しかしなぜ(公生涯において)イエシュアはそう言われなかったのでしょうか。以下にヒントがあります。

【新改訳 2017】ヨハネの福音書 7章 38~39 節

38 「わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、  
生ける水の川が流れ出るようになります。」

39 イエスは、ご自分を信じる者が受けることになる御霊について、こう言われたのである。  
イエスはまだ栄光を受けておられなかったので、御霊はまだ下っていなかったのである。

●「**栄光を受ける**」のは贖いの一連の出来事がなされて、御座に着座されてからです。ですから、この時点ではまだ栄光を受けておらず、御霊も下っていなかったのです。しかし後に御座に着座されたイエシュアが「**いのちを与える御霊となられた**」ことで、はじめて「**主は御霊です**」(=イエシュアと御霊とは一つ)とパウロは言うことができたのです(Ⅱコリント 3:17)。このことで、イエシュアの言われた「いのちを与えるのは御霊です。肉は何の益ももたらしません。わたしがあなたがたに話してきたことばは、霊であり、またいのちです。」(ヨハネ 6:63)につながるのです。このことは私たちが聖書を解釈する上で極めて大切な原則です。

●三一の神の説明を、卵のたとえで説明する人がいます。御父は卵の黄身で、白身は御子、そしてそれを包んでいるのが御霊だと。このような説明は生ける霊の神を説明するのにふさわしいものではありません。三一の神を単なる教理としてではなく、三一の神(御父・御子・御霊)の愛のかかわりのあかしを「キリストの贖い」の視点によって説明する必要があります。なぜなら、御父のみこころに完全に従い通した御子がいのちを与える御霊と

なられたことで、はじめて「三一」の真の意味が説明できるからです。

- II コリント人への手紙 3 章は、御霊に関する偉大な章の一つです。

【新改訳 2017】 II コリント人への手紙 3 章 6, 17~18 節

6 神は私たちに、新しい契約に仕える者となる資格を下さいました。

文字に仕える者ではなく、御霊に仕える者となる資格です。文字は殺し、御霊は生かすからです。

17 主は御霊です。そして、主の御霊がおられるところには自由があります。

18 私たちはみな、覆いを取り除かれた顔に、鏡のように主の栄光を映しつつ、

栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられていきます。

これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。

- 最後のアダムであるイエシュアがいのちを与える御霊となられたことで、その御霊は主を信じる者たちが「**王である祭司**」となるための「**注ぎの油**」(「クリスマ」 $\chi\rho\iota\sigma\mu\alpha$ )となります。この「注ぎの油」(=「油塗り」とも訳されます)は聖書で 22 回使われていますが、そのうちの 20 回は旧約の「祭司に関して」言及されています。新約聖書ではわずかに 2 回です。それが以下の箇所です。ここでも、「注ぎの油」とは祭司である者に注がれるものであることには何ら変わりません。

【新改訳 2017】 I ヨハネの手紙 2 章 20, 27 節

20 あなたがたには聖なる方からの**注ぎの油**があるので、みな真理を知っています。

27 しかし、あなたがたのうちには、御子から受けた**注ぎの油**がとどまっているので、だれかに教えてもらう必要はありません。その**注ぎの油**が、すべてについてあなたがたに教えてくれます。それは真理であって偽りではありませんから、あなたがたは教えられたとおり、御子のうちにとどまりなさい。

- 20 節で「あなたがたには聖なる方からの注ぎの油がある」とあります。これがキリストの贖いによって恵み(「ヘセド」 $\tau\upsilon\eta$ )として与えられているものです。その力を信仰によって私たちのうちに経験できるのが「まこと」(「エメット」 $\alpha\mu\eta\eta$ )です。**御子から受けた「注ぎの油」は「恵み」です。そして「注ぎの油」によって真理を教えられ享受することが「まこと」であって、それゆえ決して偽りの教えに惑わされることがないのです。**

## (7) キリストに贖われた者はみな祭司、「王なる祭司」

- 新約の神の子どもは、すべて祭司です。しかも「王なる祭司」なのです。その意識が今日の教会に欠落しています。祭司と言っても、旧約の祭司のように祭儀に関わる務めをすることではありません。祭司の本来の務めは、神がアダムに与えられた務めであり、地を「**耕す**」(「アーヴアド」 $\tau\rho\upsilon$ )ことです。「耕す」というヘブル語は神に「**仕える**」ことを意味する祭司用語です。この語彙が名詞になると「**しもべ**」(「エヴェド」 $\tau\rho\upsilon$ )となります。**祭司とは、神の前にいつもいることで、神の声を聞き、神を知り、神が与えるものを享受し、それを分かち務めます。**旧約のイスラエルの人々も、また新約の神の子どもも、神のみごころにおいてはみな祭司なのです。新約のしもべたちは、「良い地」であるキリスト、あるいはキリストのことばを「耕す」務めがあるのです。こ

これは聖職者の特権ではなく、すべての「王なる祭司」の特権なのです。

- ① 【新改訳 2017】 出エジプト記 19 章 6 節  
あなたがたは、わたしにとって**祭司の王国**、聖なる国民となる。・・・
- ② 【新改訳 2017】 I ペテロの手紙 2 章 5 節  
あなたがた自身も・・・、神に喜ばれる霊のいけにえをイエス・キリストを通して献げる、**聖なる祭司**となります。
- ③ 【新改訳 2017】 ヨハネの黙示録 1 章 6 節  
また、ご自分の父である神のために、私たちを**王国とし、祭司**としてくださった方に、栄光と力が世々限りなくあるように。アーメン。
- ④ 【新改訳 2017】 ヨハネの黙示録 20 章 6 節  
この第一の復活にあずかる者は幸いな者、聖なる者である。  
この人々に対して、第二の死は何の力も持っていない。  
彼らは神とキリストの**祭司**となり、キリストとともに千年の間、**王として治める**。
- ⑤ 【新改訳 2017】 ヨハネの黙示録 22 章 3~4 節  
3 もはや、のろわれるものは何もない。神と子羊の御座が都の中にあり、神のしもべたちは神に**仕え(ἵνα)**、  
4 御顔を仰ぎ見る。また、彼らの額には神の御名が記されている。

●創世記から黙示録まで、聖書は一貫して、人が「祭司の務め」を与えられた者であることを教えています。そこには聖職者(教職者)と平信徒といった区別は一切ありません。すべての者が平等な祭司であり、しかも王なる権威をもった祭司なのです。そうした意識が今日の教会に欠けているのではないのでしょうか。一人ひとりが神から大きな務めを託された者、選ばれた者たちなのです。そのような意識改革が教会に求められています。

### 3. 「包括的な私たち」と「個別的な私たち」の区別を知る

●キリストの贖いを正しく理解する上で、「包括的な私たち」と「個別的な私たち」を知っておくことは有益です。特に、「包括的な私たち」を理解することによって、パウロがしばしば語っている難解なことばの意味がよく理解できるようになるからです。以下のことばのすべての主語は「私たち」です。

- ① 「私たちはキリストとともに十字架につけられた」(ローマ 6:6, ガラテヤ 2:19, 5:24)
- ② 「私たちはキリストとともに死んだ」(ローマ 6:8, II テモテ 2:11)
- ③ 「私たちはキリストとともに葬られた」(ローマ 6:4)
- ④ 「私たちはキリストとともによみがえらされた」(II コリント 4:14, コロサイ 2:12, 3:1)
- ⑤ 「私たちをキリストとともに天上に座らせてくださった」(エペソ 2:6)

●①~⑤までの「キリストとともに・・・た」のは、私たちがこの世に存在する前のことです。それは「個別的」

ではなく、「包括的」になされたのです。つまり二千年前にはです。とすれば、キリストが「いのちを与える御霊となった」(Iコリント 15:45)ということも「包括的な事柄」なのです。それが「個別的な事柄」として私たちの現実になるのは、私たちが主に向くときですが、「包括的な事柄」の究極は、私たちがやがてキリストの再臨(携挙)のときに、「御霊のからだ」に変えられる(よみがえる)ことです。このことによって神との永遠の交わりが可能となります。私たちのからだに「御霊のからだになる」ことが福音なのです。ちなみに、「からだ」のことをヘブル語では「バーサル」(רֶשֶׁת)と言います。その語源である動詞「バーサル」(רָשַׁת)は「良きおとずれを伝える」ことを意味します。「御霊のからだ」が「個別的な私たち」の保証となるのは、すでにキリストによって「包括的」になされているからです。この「包括的な私たち」を説明してくれるたとえ(型)こそが、前(3頁)に述べた「ノアの箱舟」の話です。

## ベアハリート

●今回のセミナーでは、「百二十歳の奥義」から、人を「死と復活」によって新しく造り変えるという神のご計画が啓示されていたことを学びました。そのことを理解するためには、キリストの贖いの一連の事実を正しく理解する必要があることも学んできました。つまり、初代教会の福音の理解に戻らなければならないのです。神のご計画とみこころは、「イエシュアの贖いの一連の出来事」を通して、人を(全被造物も含めて)イエシュアの「受肉」のうちに取り込んで(包括して)、「いのちを与える御霊」によって人を全く新しく造り変えることでした。それはすでに包括的な出来事として決定的になされていることです。しかしそれが究極的になされるためには、キリストの再臨が不可欠なのは言うまでもありませんが、今日の私たちは、「すでに」という決定的な D-day と「やがて」という究極的な V-day の緊張関係を正しく理解する必要があります。

●使徒パウロが「終わりの日」を意識しながら、愛弟子テモテに対して、危機感をもって、時が良くて悪くても、みことば(=キリストの福音)を宣べ伝えること、またすでに救われている教会の一人ひとりに対しても、福音を「健全な教え」・「真理」として、キリストにあるゆるぎない希望を、忍耐の限りを尽くして、絶えず教えながら、責め、戒め、また勤めるように命じています。とりわけ、私たちに与えられている「祝福された望み」については、ほけることなく、明確に伝える責任があります。なぜなら、「終わりの日」が確実に近づいているからです。

2021.7.29

霊性の回復セミナー

銘形 秀則